

## 46 鉄五郎の仇討

伝承地：上桑島町625

話者：21



(鉄五郎の生家)

江戸時代の仇討ちとしては「忠臣蔵」と呼ばれる赤穂浪士の話しがあるが、赤穂浪士達の手本となったのが「浄瑠璃坂の仇討ち」であるといわれている。この仇討ちは、寛文8年(1668)宇都宮城主奥平忠昌の葬儀を興禅寺で営んだ際、焼香の席で家老二人が刃傷ざたとなり、殺された奥平内蔵允の

一子源八が仇である奥平隼人を江戸牛込市ヶ谷の浄瑠璃坂で討ち取った事件である。この話は直木三十五氏によって小説になったほど有名であるので、ここでは、上桑島町に伝わっている仇討ちを紹介する。

安永の頃といえば賭博に耽ける者。長脇差しを帯び乱暴する者などの悪党が多く、世の中は乱れていた時代でした。安永3年(1774)11月、上桑島町の住人権左衛門は、おともの庄兵衛と千葉県相馬郡守谷にある愛宕神社にお参りに旅立ちました。ところが、水戸・中湊の住人儀七という物とふとしたことから口論となり切り合いになってしまいました。権左衛門は四方より集まった儀七の子分どもに前後左右に取り巻かれ、ついに切り殺されてしまいました。庄兵衛も刀を抜いてすげだちをしましたが多勢に小勢で、多くの傷を受けましたが一命をとりとめ上桑島の地に逃げ帰りました。庄兵衛は、権左衛門の子鉄五郎に父親が殺された様子を話しました。その結果実際に父を殺したのは儀七の子分で香取郡小南村の清助という者であるということもわかりました。

鉄五郎は、たいへん嘆いて父の仇を討たんと思いましたが、まだ年は15歳で、かよわき腕前ではかなわないから今少し辛抱せよという母の言葉にしたがって、やむなく思いとどまりました。2年後の鉄五郎が17歳の春のことです。母の許しを得て、ただ一人旅立ちました。父の仇、清助はなかなかみつかりませんでした。ところが天明2年(1782)やっとのことで銚子あたりに清助がいるらしいことがわかったがみつかることができませんでした。ところが同年7月に小南村で善光寺如来の開帳があり、多分清助も村へ帰ってくると考えて鉄五郎は村の入口で見張っていました。案の上、清助は村へ帰ってきましたが5~6人の子分を従えていました。鉄五郎は1人の力では手の出しようもないと思い、いったん上桑島に帰り従弟の円次郎、九十郎の両人の助けだちを頼んで、再び家を出発しました。ところが、小南村に着いた時すでに清助の姿はなく調べてみると木戸村に移ったとのことでした。鉄五郎ら3人は木戸村に清助を追い10月21日夜、清助のいる家をひそかに窺ってみると15~16人程集って賭博をしているところでした。3人は竹やぶの中に身を潜めて機会を待っていると清助が一人で提灯をさげて家から出て来ました。大いに喜んだ3人は道に立ち塞がって10年来の仇と声高々に呼び掛けて清助に立ち向いました。清助も心得たりと刀を抜くところに鉄五郎が切り込みました。すかさず円次郎、九十郎など打ち重なって清助に切りかかり遂に清助を討ち取ることができました。その後、鉄五郎ら3人は、仇討の筋合を訴え、さばきを受けましたが、「孝心感心すべし」ということで釈放となり、無事、上桑島の地に帰ったということです。

